

	資料名	年代	著者・制作者	解説	所蔵者
1	護国旗			明治22年2月、柏葉と橄欖の意匠に「國」の字を加えて一高の校旗としたのは、文部大臣の森有礼であるとも、のちに校長となった木下広次であるともいう。国家のためには「全校一致身命をも顧みず砲煙弾雨を冒すの大決心を起こさしめん」という意図があった。同じ紋章は1号館の銀杏並木に面した側の上部に掲げられている。	当館蔵
2	護国旗の箱			護国旗の納められていた箱。ほかに明治天皇親署の教育勅語なども保管されていた。	当館蔵
3	憲法発布式の様子	明治22年2月11日		薩長藩閥政府の専横の止むことを期待し、大学生や一高生は憲法の制定を歓迎した。多くの学校が「万歳」の練習を行って、発布式当日にはこれを披露した。	当館蔵
4	帽章			軍神マルスの象徴である柏と、知識と美術の女神ミネルヴァの象徴であるオリブ（橄欖）を組合わせたもの。柏葉橄欖章といい、現在も本学部の正門などに同じ紋章が見られる。	当館蔵
5	机椅子				当館蔵
6	制服				当館蔵
7	長岡半太郎履歴書	明治14年8月23日	東京大学予備門	長岡半太郎が大阪中学校から東京大学予備門に移る際に提出されたもの。長岡は明治9年に東京英語学校に入学し翌年11月退学、明治12年1月に大阪英語学校に入学し、大阪専門学校・大阪中学校と名称を変えた同校から明治14年に東京大学予備門に移った。	当館蔵
8	東京大学予備門明治15年4月第1級1ノ組名簿	明治15年4月25日	東京大学予備門、丸家善七	長岡が編入された第1級1ノ組の名簿。長岡の名前は下段左から二日目。その4つ右に法学に進んだ平沼駿一郎の名前があることからわかる通り、志望専攻別の編成ではない。この時期は第1級が最上学年であり、長岡は明治15年に予備門を卒業した。名簿の冒頭に、組分けが優秀によるものでない旨、断り書きがある。	当館蔵
9	谷田部梅吉出題の物理の試験問題	自明治14年至明治15年	東京大学予備門	長岡が予備門で学んだ物理学の授業の試験問題。出題者は東京大学仏語物理学科卒の谷田部梅吉。谷田部は数学教員として雇用されているが、最上級で学ぶ物理学も担当した。英語の教科書を用い、試験も英語で出題された。	当館蔵
10	東京大学予備門明治15年4月第3級4ノ組名簿	明治15年4月25日	東京大学予備門、丸家善七	木村は明治14年1月に予備門の第4級（第1学年）で入学した。その後、予備門の年限が4年から3年に変更になったため、明治14年から15年までの学年では、依然として最下級学年の第3級に在籍しており、長岡の2年下である。	当館蔵
11	木村教諭日課表	自明治23年9月至同24年6月	第一高等学校	木村は、1部（法・文）、2部（工・理）、3部（医）の生徒のほか、予科のうちドイツ語を修めた入学者（トヨ）、英語を修めた入学者（エヨ）にも物理学を講じた。予科にはほかにフランス語での入学者の組もあった。日課表からは、物理学のほか、倫理も教えていたことがわかる。	当館蔵
12	内村鑑三辞表 一部写真	明治24年1月31日	第一高等学校	内村鑑三が木下廣次に提出した辞表。実際には木村駿吉が代筆した。不敬事件を内村側に立って処理したのが木村であったことが分かる。	当館蔵
13	木下廣次宛木村駿吉書簡 一部写真	明治24年2月21日	木村駿吉	不敬事件後に木村駿吉が木下廣次に送った手紙の封筒。内村の辞表も宛先は木下廣次であるが、筆跡が酷似しており、また「内郵」「木郵」と「郵」の字を用いる点も共通している。	当館蔵
14	れんとげん投影写真帖	明治29年5月15日	第一高等学校、丸善株式会社書店	1895年（明治28年）末、ドイツのレントゲンが写真乾板を感光させる目に見えない線（X線）を発見した。そのしらせは、翌年初めには、長岡半太郎らによって日本にも伝えられ、帝国大学・第三高等学校などでもX線発生実験が行われた。第一高等学校でも、山口鏡之助・水野敏之丞らが明治29年4月までに発生に成功し、魚や小動物などの撮影を行った。	当館蔵
15	第一高等学校平面略図		第一高等学校	明治末から大正期にかけての第一高等学校の平面図。理科系の教室・実験室などは、南西の角（図面では右下）にあった。	当館蔵
16	高等学校数学科物理教科書意見	明治35年3月頃	第一高等学校	物理科では教科書は用いていないが、ロンメル、リーケ、ガノーの教科書（の英訳）を補助的に用いることを推奨している。	当館蔵
17	力学	明治末	第一高等学校	明治末頃の力学の教育内容。単位、次元、静力学、質点力学、剛体の力学、弾性力学が扱われている。	当館蔵
18	『向陵誌』より理科関係の教室	大正2年6月16日	第一高等学校寄宿寮	本郷の校地では南西の角に集中していた理科関係の教室。	当館蔵
19	『向陵誌』より測量実習	大正6年6月16日	第一高等学校寄宿寮	珍しい測量実習の写真。機器を納める箱には皮ベルトがついている。	当館蔵
20	2部2年1ノ組（工科）日課表	自明治26年9月至同27年6月	第一高等学校・第一高等学校	市川紀元二のいた組の最終学年（このときは2年）の時間割。原龍太の教えた測量の時間（土曜日午前）に実測図を作成した。時間割中に兵式体操はない。	当館蔵
21	クロノグラフ Chronographe		Bruhl Bros & Co.	横浜のBruhl Bros & Co. が輸入販売したストップウォッチの機能の付いた時計。同商会の日本での営業は明治36年（1903）まで。裏蓋に葡萄の刻印がある。	当館蔵
22	明治27年卒業写真	明治27年	小川一真	市川紀元二の卒業した明治27年に撮影された卒業写真。この年の卒業生は141名。	当館蔵
23	物品書留簿（測量室）		第一高等学校	測量室の備品の入手状況などが記されている。明治23年3月4日に陸軍参謀本部よりブーソルエクリメートルなどが交付され、以後、測量の教育・実習が本格化した。	当館蔵
24	一年志願兵在学証明書	昭和2年	第一高等学校	中学校等の卒業生は、兵役に関して一年志願兵を選択することができ、さらに高等な教育機関に在学している間は入営延期を願い出ることができた。本資料は、願出に必要な在学証明書の交付を依頼する手紙を綴ったもので、一年志願兵の制度が廃止された昭和2年の分。	当館蔵
25	測量科教授細目			明治期後半の測量教育の細目を記したもの。導入部は日本語で記されているが大半は英語で書かれており、授業や実習でも英語が用いられたものと思われる。	当館蔵
26	トランシットの掛図	明治30年5月25日	第一高等学校	サーヴェイヤーズ・トランシットの取り扱いを説明する際に用いられたものと思われる掛図。	当館蔵
27	ブーソルエクリメートル	19世紀後半		ファーブル・ブランド社を介して輸入したもの。陸軍参謀本部が購入したが、ドイツ式への全面的な移行に伴い、明治23年に文部省経由で高等学校に交付された。	当館蔵
28	ブーソルエクリメートルの箱	19世紀後半		「陸軍参謀本部測量課」の焼印がある。	当館蔵

	資料名	年代	著者・制作者	解説	所蔵者
29	トランシット	19世紀末	W. & L. E. Gurley	W. & L. E. Gurley製。東京帝国大学工科大学土木教室が所蔵していたもの。初期に測量を教えた原龍太は、東京大学理学部で米国式の教育を受けており、米国製の機器になじみがあったものと思われる。	当館蔵
30	トランシットの箱	19世紀末	W. & L. E. Gurley	「東京帝国大学工科大学土木教室之印」の焼印がある。	当館蔵
31	高等師範学校実測図	明治27年4月	市川紀元二、萩原時次、細正之助、大塚千里、依國一、藤農之、小西正二	市川紀元二、依國一らが測量の実習で製作した実測図。生徒の作品のうち、優れたものは、教材として掛図に直され、図書館で管理された。	当館蔵
32	星岡公園実測図	明治30年6月	伊東敏三郎；今泉五郎；波多野友江；服部直樹；保科貞；東條侯一；柿内貞雄；津田素彦；津澤清；倉持一三；山川真吉；山根三樹；山口鑄次郎；松田清一；阪田貞明	星岡とは現在の千代田区永田町近辺であり、見晴しのよいことからこの名がついた。明治維新前は日枝神社の社域であったが、維新後に維持が困難となり、東京市に寄付されている。ここには麹町公園が設けられることとなったが、財界人の提言により星岡茶寮が設けられ、社交場となった。日枝神社、星岡茶寮ともに図中に見える。	東京大学駒場図書館蔵
33	小島憲之	大正6年	岡田三郎助	小島憲之はコーネル大学で建築を学び、東京大学理学部、工科大学校等で教鞭をとった。東京大学予備門、一高でも図画や英語を教えている。絵の製作者の岡田三郎助はフランスに学んだ洋画家で、東京美術学校教授を務めた。	当館蔵
34	2部2年3組日課表	自明治33年9月至同34年6月	第一高等学校	石原純の組の時間割。数藤斧三郎が数学のうち代数を、小島憲之が国語を、小川正孝が化学を担当している。	当館蔵
35	数藤斧三郎	大正9年	中村彝	数藤斧三郎は、帝国大学理科大学で学び、二高などを経て明治31年から一高で数学を教えた。五城、小野三郎の名で俳句や短歌も詠んだ。石原純が短歌を作るようになるのは、数藤の教えを受けていた一高時代のことである。	当館蔵
36	南俊次「石原純氏講演『向陵時報』85号より	昭和11年6月25日	第一高等学校寄宿寮	科学会の招きで石原純が昭和11年6月11日に行った相対性理論についての講演の記事。石原はこの時点でも相対論に関する日本の最高権威とみなされている。講演は一般相対論にも及んでおり、理解は困難であったであろう。一高科学会は菊池泰二らの呼びかけで大正3年に発足し、長岡半太郎などの科学者の講演を企画した。	当館蔵
37	『空間及時間概念』	大正11年	石原純、改造社	改造社の招きで大正11年にアインシュタインの来日を実現する。その前後、物理学者から科学ジャーナリストに転じた石原純は多くの解説書を出版し、アインシュタイン来日時には通訳を務めた。	東京大学駒場図書館蔵
38	橋田日課表	自昭和13年4月至昭和14年3月	第一高等学校	橋田は、昭和12年4月より、東京帝国大学教授と一高校長を兼務するようになった。同13年から14年にかけては倫理を教えている。講義に出席した高木彬光によれば、講義は深遠で、「ラテン語でも聞いているように」わけがわからなかったという。	当館蔵
39	3部3年2組日課表	自明治36年9月至同37年6月	第一高等学校	橋田邦彦が在籍した組の時間割。独・仏・英語に加えて、ラテン語もある。	当館蔵
40	第48回記念祭式典で講演する橋田邦彦	昭和13年2月1日	西岡清之助	第48回記念祭は昭和13年2月1日に開催され、その後の茶話会には、石原純、戸坂潤などの一高卒業生が招待された。茶話会では、戸坂の科学的精神に関する講演に、橋田が反駁を加えている。在学中の南部陽一郎も出席しているものと思われる。	当館蔵
41	晩餐会で発言する橋田邦彦	昭和15年6月19日	近松良之	この晩餐会から1か月ほど後に、橋田の文部大臣就任の報が伝えられることになる。	当館蔵
42	橋田邦彦と後任の校長の安倍能成	昭和15年9月21日	近松良之	昭和15年9月21日朝、安倍能成は東京に到着し、橋田に挨拶したのち、校長として初めて一高生の前に登場した。	当館蔵
43	橋田邦彦と護国旗	昭和15年9月21日	近松良之	新校長の安倍能成を迎え、自身は一高を離れる橋田の挨拶。	当館蔵
44	3部1年2組時間割	自大正元年9月至同2年6月	第一高等学校	国崎定洞の1年次の組の時間割。英語はのちに校長を務める森巻吉が、数学は物理学者の寺沢寛一が担当している。独・仏・英語などの語学が35時間中21時間を占める。	当館蔵
45	『名著の手鑑』	大正3年	第一高等学校寄宿寮	国崎は大正3年1月から4月にかけて寄宿寮委員を務めた。『名著の手鑑』は、その職務を全うした名著を伝えるために、歴代の委員の氏名を自署させて残したものの。	当館蔵
46	大正4年医科の卒業写真	大正4年	新橋江木写真店	国崎の在籍した3部（医科）の卒業生（3年生）の大正4年5、6月頃の写真。	当館蔵
47	『共産主義の左翼小児病』	昭和3年	レーニン、和田哲二、希望閣	レーニンの著作を、国崎定洞が和田哲二の名でドイツ語から重訳した。大正15年のうちに翻訳は完成し、昭和2年に刊行されたが、初版はたちどころに発禁となった。展示しているものは昭和3年刊行であるが、伏字や削除が目立つ。	個人蔵
48	寄宿寮記録	大正6年5月26日	寄宿寮委員	大正6年5月26日の3年生送別を兼ねた茶話会での土井不曇の発言。技量あるものが敗れるのは緊張が足りないためであると語り、「緊張」と絶叫しながら降壇した。	当館蔵
49	土井日課表	自大正11年4月至大正12年3月	第一高等学校	土井不曇は大正11年から15年まで力学の講師を務めた。理甲（英語）・乙（独語）の3年生を担当しており、能力は信頼されていたものと思われる。	当館蔵
50	中寮十番	大正7年-8年		戸坂が居た中寮十番の居住者の写真。戸坂は後列右から三番目。このとき2部1年3組。	当館蔵
51	茶話会の余興「黎明の危機」	大正8年5月15日		大正8年5月15日の全寮茶話会で中寮十番が行った余興、「黎明の危機」（あかつきのあやぶみ）の写真。戸坂潤は無政府主義者の大杉栄を演じた。劇の内容は、「混乱の現在の日本を建直すは一高精神あるのみとする」というもの。	当館蔵
52	2部1年3組の名簿	大正7年12月22日	第一高等学校、丸善株式会社	戸坂潤の入学試験の成績は首席であった。当時の名簿は成績順。	当館蔵
53	大正10年3月31日大学予科卒業生氏名	大正10年3月31日	第一高等学校	この年の理科の卒業生は12名。戸坂の成績は3位。中学校からの友人であった村山知義（文科）や内田昇三（理科）の名前も見える。戸坂らは9月入学であった（この時期は卒業は6月）が、大正7年12月に高等学校令が改正され、卒業は3月に繰り上げられた。	当館蔵
54	2部2年3組日課表	自大正8年9月至同9年6月	第一高等学校	戸坂潤が在籍した2部2年3組の時間割。大正8年9月に第八高等学校より赴任した竹内端三が数学を教えている。問題を当てられた戸坂は、根本から解こうとして時間をかけたが、竹内はその手間を省くために公式程度は覚えておかなければならないといったという。	当館蔵
55	理甲3年2組の時間割	自大正11年4月至同12年3月	第一高等学校	菊池正士の在籍した理甲3年2組の時間割。土井不曇が力学を担当している。	当館蔵
56	砲丸投げをする菊池正士（『向陵グラフィック』より）	大正11年9月25日	第一高等学校寄宿寮	1年生のときの菊池正士。対三高陸上競技における砲丸抛の選手であった。	当館蔵
57	大正12年3月31日第一高等学校卒業生及修了生氏名	大正12年3月31日	第一高等学校	菊池正士の名前は理科甲類（第一外国語が英語）88名の中にある。同学年中、同じ理甲に坪井忠二、山内恭彦、理乙に吉田富三、文甲に迫水久常、河上徹太郎、文乙に岡義武の名前がある。	当館蔵
58	理甲3年2組の時間割	自昭和5年4月至昭和6年3月	第一高等学校	理甲3年2組の昭和5年4月から同6年4月までの時間割。このころ岡邦雄や田辺振太郎は実験を担当していたが、彼らの名前は時間割には載らない。	当館蔵
59	岡邦雄自筆履歴書	大正13年9月	第一高等学校	岡邦雄が大正14年1月に一高嘱託となった際に提出した履歴書。岡は、東京通信局工務部機械課に勤務しながら大正3年7月に東京物理学校を卒業し、海軍造兵廠・九州帝国大学・日本蓄電池・茨城県立工業学校・東京府立織染学校での勤務を経て一高に採用された。	当館蔵

	資料名	年代	著者・制作者	解説	所蔵者
60	岡邦雄が一時恩給請求書に添えた手紙	昭和7年4月25日	第一高等学校	岡邦雄は昭和7年3月25日に依頼免本官となった。昭和2年にレーニンの『唯物論と経験批判論』についての論評を発表するなど、共産主義・唯物論関連の研究を行っていたため、これを理由に敵首されたとも言われる。形式上は、行政整理の一環の依頼退職であり、恩給増額のために退職日付で給与の等級も上げられている。	当館蔵
61	『婦人公論』昭和11年12月号目次	昭和11年12月1日	中央公論社	妻子がありながら20歳以上の離れた樹本セツとの生活を選んだ岡邦雄の行動は、広く一般の関心を集め、『婦人公論』では、岡、「岡氏夫人」の美津、「岡氏愛人」の樹本セツの3人の主張に、野上弥生子、神近市子らの論評を加えた特集が組まれた。	個人蔵
62	田辺振太郎自筆履歴書	昭和4年8月	第一高等学校	のちに岡邦雄と唯物論研究会で活動を共にすることになる田辺振太郎が、化学実験担当の一高副手に採用された際に提出した自筆履歴書。	当館蔵
63	田辺振太郎辞職願	昭和8年3月17日	第一高等学校	昭和8年3月、田辺振太郎は唯物論研究会での活動を理由に逮捕され、一高も辞職せざるを得ない事態となったが、病気を理由とする辞職願が受理され、依頼解免となった。	当館蔵
64	畑敏雄退寮除名の通知	昭和8年3月30日	第一高等学校、第一高等学校寄宿寮	理科乙類3年の畑敏雄が昭和8年3月30日に受けた退寮・除名の処分を伝える手紙。不穏の行為を理由とする処分であるが、3年次の年度末直前に行われており、これで卒業の資格を失うという厳しいものであった。畑はのちに、東京工業大学教授、群馬大学学長を務めた。	当館蔵
65	眞田宏「科学としての唯物弁証論」	昭和11年6月13日	第一高等学校寄宿寮	『向陵時報』84号（昭和11年6月13日）掲載の論文。唯物弁証論を社会学の理論体系として規定し、哲学と区別しようとする試みについて論ずる。「科学」の語が、社会に関する学問として、「哲学」と対比的に用いられている。	当館蔵
66	Die Kommunistische Internationale	昭和3年9月26日	共産主義インターナショナル執行委員会	コミンテルンの週報で、露独仏英語で刊行された。1928年に一高の文乙3年の喜多村浩のもとに郵送されたものが見つかり、没収された。	当館蔵
67	処罰録	昭和6年5月8日	第一高等学校	喜多村浩は、一高社会科学研究会（IS）幹部であり、不穏印刷物保管、不穏ナル言動により処罰の対象となった。いったん勘当されたが改悛の情のあることを認められて許された。一高は昭和4年3月に除名となったが、その後、ドイツに留学した。	当館蔵
68	思想関係処罰生徒氏名	昭和2～7年、20年、21年	第一高等学校	喜多村浩は、親族会議で改悛を促されたが、主義をまげなかったようである。のち、経済学者となり、東京都立大学教授などを務めた。	当館蔵
69	生徒処罰二関スル綴	昭和6年3月～9月	第一高等学校	生徒の処分やその理由を記した書類の綴。「不穏ノ行為」が左翼活動に関わるもので、「不都合ノ行為」は政治的な含みのないもので、処罰を受けた生徒には理科所属の者も多い。	当館蔵
70	生徒処罰報告書	昭和5年11月	第一高等学校	壊滅状態にあった一高内の左翼組織を再建するため、読書会（RS）などの組織が設けられ、勧誘が行われた。	当館蔵
71	生徒左傾運動	昭和8年	第一高等学校	学内の組織が壊滅したのちも、共産党など外部の組織から一高生徒への働きかけは続いた。具体的には、学内に自由な大衆の組織として文化団体を設ける、資金調達メンバーを獲得するなどの活動が行われた。	当館蔵
72	昭和12年生徒写真帖理甲1年1組	昭和12年		南部陽一郎の組の写真。入学試験の成績順に並んでおり、中原敬介が1番、南部は下から4番目。	当館蔵
73	理甲2年1組名簿	昭和13年12月20日	第一高等学校	南部陽一郎が2年生になったときの名簿。南部は、1年のうちに組の中で首位が上がったことが分かる。	当館蔵
74	昭和15年3月31日第一高等学校卒業生氏名	昭和15年3月31日	第一高等学校	卒業時には、南部は理甲全体で3位であった。	当館蔵
75	『名誉の手鑑』	昭和13年	第一高等学校寄宿寮	南部陽一郎は昭和13年5月から一期寮委員を務め、『名誉の手鑑』に自筆の署名を残した。	当館蔵
76	理甲2年1組の時間割	自昭和13年4月至同14年3月	第一高等学校	南部陽一郎の組の2年生の際の時間割。橋田邦彦の修身の時間がある。	当館蔵
77	寄宿寮委員記録	自昭和12年12月至昭和13年5月	西岡清之助	昭和13年2月1日の第48回記念祭茶話会には、石原純や戸坂潤も招かれた。戸坂が行った科学的精神についての講演に対し、校長の橋田は、利用価値のみを重視するのではなく、感謝の心が大切であるとすする反駁を加えた。当時1年生であった南部陽一郎もこの議論を聞いたものと思われる。	当館蔵
78	寄宿寮委員記録	自昭和15年6月至昭和15年10月	近松良之	昭和15年7月21日の対三高の陸上競技戦では一高が勝利したが、食堂で行われた祝勝会のさなか、佐々木順三生徒主事が、橋田邦彦校長が文部大臣に内定した旨を告げた。室内は一瞬静まったのち、「校長万歳」の叫び声に満ち、全員が応援歌を歌って祝った。	当館蔵
79	第一高等学校建物及工作物配置図	昭和12年3月31日	第一高等学校	昭和10年に駒場に移転したのち2年たったあとのキャンパス。理科系の教室は西側（図では左側）に建てられたが図面には載っていない。	当館蔵
80	昭和12年の一高	昭和12年	第一高等学校	一高の航空写真。写真の左側に理科系の建物が設けられた。右下には、農学部時代にグラウンドが設けられていた跡が見える。	当館蔵
81	紀元二千六百年紀元節ニ賜ハリタル詔書	昭和15年2月11日		西暦1940年が皇紀2600年にあたることから、各地で奉祝の催しが企画された。東京ではオリンピックや万国博覧会も開催される予定であったが、日中戦争や第二次世界大戦の影響により実現しなかった。	当館蔵
82	第一高等学校教科書目録	昭和15年	第一高等学校	昭和15年当時用いられた教科書の目録。数学も理科も日本語で書かれた教科書を用いている。石川光春、竹内潔、高橋聖、竹内端三など、一高の教員の著作も用いられていた。	当館蔵
83	学校防空指針	昭和18年11月15日	文部省、内務省	空襲に備えて対策を指示した文書。教頭・部長室用。	当館蔵
84	光電子増倍管	昭和58年頃	浜松ホトニクス	小柴昌俊が建設を指揮したニュートリノの観測施設、カムイオコンデで使われた光電子増倍管。陽子崩壊に伴うニュートリノの発生をチェレンコフ光の観測によってとらえようとしたもの。小柴は、従来の規格を超えた特大の光電子増倍管を浜松ホトニクスに製作させた。	当館蔵
85	寄宿寮記録	昭和22年11月28日	乙骨明夫	小柴昌俊は昭和21年12月から翌年4月まで寮委員会の副委員長を務めた。この代の委員会は委員中に流職事件があり総辞職したが、小柴はその後も総代会などで活発に発言した。	当館蔵
86	昭和23年3月31日第一高等学校卒業生氏名	昭和23年3月31日	第一高等学校	小柴昌俊は理甲2組。28人中11位の成績で卒業した。	当館蔵
87	理甲3年2組の時間割	自昭和22年4月至昭和23年3月	第一高等学校	小柴昌俊の組の3年の際の時間割。倫理は当時校長であった天野貞祐。天野は小柴が大学で物理に進むと知ると、かつての恩師の息子で、自分が仲人を務めた人がやはり物理をやっていることを伝え、「どれくらいできる人なのか私にはわかりませんが」と断って紹介した。小柴はこうして朝永振一郎と知り合った。	当館蔵
88	フーコーの回転鏡	19世紀末	Société Genevoise ジュネーブ、スイス	蒸気力で鏡を回転させ、そこに光を当て、反射光が発光源からわずかにずれた箇所に戻るのを観測して光速を求める機器。フーコーはこの機器で秒速298,000kmというよい値を得た（1862年）。	当館蔵
89	回転鏡（現代）	現代	島津理化器械株式会社	現代の回転鏡。フーコーの時代のもとは異なり、電気モーターの力で鏡を回転させている。	当館蔵
90	『実験及び理論 物理学 光学』	大正九年（初版明治四十四年）	森総之助、積善館	第三高等学校で用いられていた教科書。光速測定実験の一つとして、フーコーの回転鏡が解説されている。	当館蔵

	資料名	年代	著者・制作者	解説	所蔵者
91	Cours de Physique de l'École Polytechnique	1869年	J. Jamin, Gautheir-Villars, Imprimeur-Libraire パリ	一高所蔵の、ジャマンによる物理教本第三巻。右下からフーコーの解説が始まっており、また巻末に解説図がある (Fig. 695.)。なお著者は、本展示の別コーナーにある干渉計の製作者でもある。	東京大学駒場図書館蔵
92	フーコーの光速測定再現実験 (5分30秒)	2006年7月18日		東京大学で行われたフーコーの光速測定再現実験。音のうなりを利用して鏡の回転数を割り出している (3分~3分50秒)。	当館蔵
93	ジーメンス・ダブルブリッジ	20世紀前半	Siemens & Halske	ダブルブリッジは、トムソンブリッジ、ケルビン・ダブルブリッジとも呼ばれ、ホイートストン・ブリッジに補助回路を付け足すことで、より小さな抵抗値の測定が可能となった。ジーメンス・ダブルブリッジは、抵抗を円形に配置しているのが特徴である。	当館蔵
94	鉄被検流計	西暦1920年代以前	Siemens & Halske	地磁気などの外部磁気の影響を取り除くために、厚い鉄で遮蔽された検流計。内側に球状の遮蔽を、外側に円筒状の遮蔽を取り付ける。	当館蔵
95	デケードブリッジ	19世紀末~20世紀前半	Hartmann & Braun フランクフルト・アム・マイン、ドイツ	ピンの抜き差しにより、標準抵抗の値を容易に操作することができるブリッジ。手前の丸い端子には検流計や電源を、右側の丸い端子には測定したい抵抗をつなぐ。	当館蔵
96	鉄被検流計部品	西暦1920年代以前	Siemens & Halske	鉄被検流計の部品。箱の側面には鉄被検流計と同じE. 314という数字が書かれている。Eは電気分野の実験機器であることを示す。ふたには「理科大学物理学教室」の刻印がある。	当館蔵
97	物理実験帖	自大正15年至昭和2年	小穴純	第一高等学校理科甲類の学生、小穴純の実験ノート。ホイートストン・ブリッジで測定した抵抗値が記録されている。	当館蔵
98	第一高等学校の物理学実験テキスト	大正15年以前	第一高等学校物理教室	第一高等学校物理教室の実験テキスト。全30の実験のうち、ホイートストン電橋(ブリッジ)は第23。	当館蔵
99	ジャマン干渉屈折計	1870年頃	J. Duboscq	土井不曇は、ジャマン干渉屈折計を用いた実験で、エーテルに対する地球の運動を観測し、相対論を否定する証拠を得ようとした。	当館蔵
100	『改造』大正11年11月号	大正11年	改造社	改造社がアインシュタイン招聘を計画し、『改造』において大々的な広告がうたれた。その広告には、土井不曇や石原純の名前もある。	東京大学駒場図書館蔵
101	Scientific Instruments	昭和10年代	理化学研究所	ジャマン干渉屈折計に対し、土井が改良を加えた「土井式屈折計」のカタログ。二枚のガラス板を平行にするための調整が容易になった、とある。	当館蔵
102	寄宿寮記録	大正11年6月1日	倉上晃、牧野信之助	この記事には、盗難にあった一高生の紛失物品が記されており、その中には石原純の著作もある。石原の相対論の解説書が、一高生にも読まれていたということであろう。	当館蔵
103	『物理通話』	昭和15年	土井不曇、研究社	アインシュタインの来日から18年後に出版された土井不曇の著作。依然として相対論に対する「濃厚な疑惑」を表明している。	個人蔵
104	『アインシュタイン博士相対性原理』	大正11年	石原純、大阪毎日新聞社	アインシュタインの来日時に、通訳を務めた物理学者の石原純は、数多くの相対論の解説書を出版した。	東京大学駒場図書館蔵
105	ジュゴン (頭骨)		柴山自然科学研究所	Halicore dugong, Illiger. と記されているが、正式な学名は Dugong dugon. カイギョウ目カイギョウ科の動物。1属1種。南西太平洋・インド洋・アフリカ沿岸の浅海域に分布。1対の乳房があり、授乳する姿があたかも子供を抱いている母親を思わせることから、人魚はジュゴンを間違えたものとする説がある。	当館蔵
106	鯨図 教育用掛図	明治24年9月19日	第一高等学校	複製 実物寸法: 1492 × 1131 mm	当館蔵
107	ニワトリ		柴山自然科学研究所	一高が柴山自然科学研究所から譲り受けたものと思われる。	当館蔵
108	鳥之骨格之図 教育用掛図	明治23年7月3日	第一高等学校	複製 実物寸法: 653 × 814 mm	当館蔵
109	『ストラスブルガー植物学』上巻第1冊形態学	大正14年(初版大正2年)	エドワード・ストラスブルガー、隆文館	大学で用いることを想定して書かれたドイツ語の植物学の教科書を、東京帝国大学農科大学の三宅驥一と草野俊助が翻訳したもの。展示箇所は珪藻などの説明に関する部分。	当館蔵
110	第老高等学校生物化学室『植物標本目録』二冊	明治24年11月	安江豊太郎	外国製および小石川植物園の標本の目録。1冊が下書き、もう1冊が清書。	当館蔵
111	柳田友輔の授業	昭和17年頃		ニワトリの骨格標本を用いている。柳田は「たぬき」の愛称で親しまれた生物学の教官。	当館蔵
112	石川光春の授業			顕微鏡を用いて珪藻などを観察している。石川は植物細胞学者。一高生からは「デコシャン」と呼ばれた。	当館蔵
113	高等学校大学予科地質鉱物教授細目	明治34年2月	第一高等学校	展示箇所は鉱物学の講義の細目を記している部分。鉱物学総論に続き、鉱物形像論、鉱物物理論、鉱物化学論が教授され、鉱物各論へと続く。	当館蔵
114	地質学 I	大正13年	小穴純	大正13年に行われた地質学の講義のノート。偏光顕微鏡の用途について記している。筆記したのは理甲1年2組の小穴純。のちに光学機器の大家となる。	当館蔵
115	偏光顕微鏡	大正13年	Ernst Leitz ヴェツラー、ドイツ	東京帝国大学の地質学教室で購入され、のちに一高に譲られたものと思われる。大正13年11月に272円で購入された。	当館蔵
116	アッペ屈折計	1928年頃	C. Zeiss イエナ、ドイツ	ドイツのZeiss社が1928年頃に製造した屈折計である。全反射を利用して屈折率を測定する機器であり、二つの直角三角形の部品のうち、上の方にアッペ半球が装備されている。二つの直角三角形の部品の間のわずかな空隙に2、3滴を入れることにより、液体の屈折率が測定できる。	当館蔵
117	R. Fuess水平円盤反射測角器	1890年頃	R. Fuess ベルリン、ドイツ	光源からの光線が入るコリメーターと、観測に用いる望遠鏡が円盤上に設置されており、望遠鏡の位置を回転させることにより、試料表面が光を反射させる角度が測定でき、これにより試料を構成する結晶の向きを調べることができる。	当館蔵
118	鉱物岩石標本	昭和24年12月	日本アース・サイエンス社	一高から教養学部になる時に整備された標本の一部。日本アース・サイエンス社は現在の株式会社ニチカ。鉱物・岩石それぞれ100点ずつをまとめて購入し、それまでの標本とあわせて昭和24年から翌年にかけて鉱物台帳(旧台帳)を作成した。	当館蔵
119	投影面付き六角柱模型	19世紀後半	J. Schroder 作 ダルムシュタット/ドイツ製	水平・鉛直面への投影の仕組みと、任意の方向からの投影の作図を表した模型。六角柱には穴が2箇所あり、直立させるときと斜めに回転させたときの関係を理解できるようになっている。第1学年の科目「投影画法」を教えるのに用いられたと思われる。木製に紙貼り。	当館蔵
120	投影面付き円柱模型			円柱の切断と水平投影面・鉛直投影面への投影を表す模型。切断した楕円の表形の作図と異なる方向からの投影を示す。明治26年に帝国大学工科大学より「プレーン付き模型」を68個譲り受けている。その一つか、木製。	当館蔵
121	六角柱円錐相貫模型(差立体)			第一高等学校画学室は、明治24年にブリキ製の立体模型を19個購入しており、その一つと思われる。六角柱を円錐で切り抜いた相貫体である。第一学年Plate7に対応する説明用の立体である。	当館蔵
122	Problems on Descriptive Geometrical Drawing (Plate)	1878年刊	E. F. Mondy 著	明治35年(1902)の「図画科参考用書」は本書を「二部第二年級投影画法・図法幾何」の授業で用いる参考書としている。textとplate(図面集)の2冊からなる。	東京大学駒場図書館蔵
123	画学模型(陰影付き)			円錐面の凹部に落ちる影と光の当たらない陰を描いた模型。第二学年の陰影の説明で用いられたと思われる。木製。	当館蔵

	資料名	年代	著者・制作者	解説	所蔵者
124	面学模型 (陰影付き)			球面と円柱面でくりぬかれた立体に落ちる影を描いた模型。第二学年の陰影の説明で用いられたと思われる。木製	当館蔵
125	面学模型			工部大学から譲り受けた模型の一つ。明治23年、第一高等学校(第一高等学校)の面学室は、工科大学(東京大学工学部)より立体模型をまとめて無償で譲り受けた。これら模型には「工部大学校図学場の焼印」が押されている。図学場は第一図学場から第六図学場までであった。木製	当館蔵
126	ハート・カム		島津製作所	等角速度回転運動を等速往復運動に変換するカム機構。第3学年の「機械図」の解説に用いられたと思われる。	当館蔵
127	物理器械目録	1929年	島津製作所	特殊な歯車機構やリンク機構を含む50の機構模型が掲載されている。	当館蔵
128	軸架模型	19世紀後半		明治33年(1900年)に東京帝国大学工科大学より無償で譲り受けたものの一つ。底面に工科機械備品の朱書きがある。第3学年の「機械図」で用いられたと思われる。木製彩色	当館蔵
129	Le Praticien Industriel 『産業実務家』	19世紀後半	Stanislas Petit	建築・機械など126図120枚からなる図面集である。第3学年の機械図の最終課題に用いられている。	当館蔵
130	『産業実務家』 PL. 116 「蒸気消防車」	19世紀後半	Stanislas Petit	蒸気機関を用いた消防ポンプ車の図。ホースの曲線も含めて、中心点を記した円弧の組み合わせで描いてあり、手本として作られた教材である事が推測できる。	当館蔵
131	六角柱球相貫体 (和立体) 模型 木製	明治26年(1891) 購入		第1学年の科目「投影画法」で用いられたと思われる。六角柱と球の和立体を切断しその断面形状が見えるように作られている。	当館蔵
132	面学模型			四角錐を与えられた平面で切断した断面を求める手法を説明した模型。投影面が回転して折り畳めるように作ってある。切断する平面および四角錐の稜線を含む平面二つの軌線(投影面との交線)にあわせて溝が掘ってあり、ガラス板等を差し込んで使用したと思われる。木製	当館蔵
133	蒸気機関説明器		島津製作所	ピストンを断面で見せて、蒸気機関の仕組みを説明した機械模型。第3学年の「機械図」の解説に用いられたと思われる。	当館蔵
134	ペベルギア			交差する位置にある回転軸の回転を伝える歯車構造である。第3学年の「機械図」の解説に用いられたと思われる。	当館蔵
135	並行定規			平行線を引くのに用いる定規。パンタグラフ機構を用いている。	当館蔵
136	三角定規			「工部大学校図学場」の焼き印がある。木材の収縮の影響を最小限とするため、木目方向を各辺にそろえて作られている。縁は黒檀製。	当館蔵
137	雲形定規			円弧以外の曲線を近似的に描くための定規である。	当館蔵
138	製図器セット			ディバイダ、コンパス、烏口など。第一高等学校では製図用具を定価の1割の料金を取って、1学期間生徒に貸し付けた。	当館蔵
139	楕円定規 (板書用)	明治36年購入		等角図における円(軸長の比が1:√3)を描くために用いられた。第一高等学校の焼き印が押されている。	当館蔵
140	文字テンプレート			レタリングに用いる文字・数字のテンプレートである。銅製。	当館蔵
141	第一学年「投影画法」Plate 5	明治35年(1902)	沖巖	S. E. WarrenのElementary Projection Drawing (1873)より採用したものである。水平投影面と鉛直投影面に対して斜めに置いた円柱・六角柱を画くもので、基本立体の投影を画く課題の一つである。まずは基本立体を投影面に対してまっすぐに置いた作図をし、それを回転させることで任意の傾いた視点を得るという原理で描かれている。	当館蔵
142	第一学年「投影画法」Plate 7	明治35年(1902)	沖巖	六角柱と円錐の相貫体(和立体)を描くものである。相貫とは、互いに貫く立体形状の論理和・論理差・論理積を求める課題であり、交差部の曲線を求めるために、側面図において六角柱の稜線が一点に見える事を利用してそれぞれの稜線と円錐面との交点を求めている。	当館蔵
143	第一学年「投影画法」Plate 10	明治35年(1902)	沖巖	等角図を描く課題。等角図とは、直交する三軸が互いに120°をなす方向から直投影を行った図であり、それぞれの軸方向の縮率が等しくなることから、等測(アイソメトリック)図とも呼ばれる。題材としては洋式の小屋組(キング・ポスト・トラス)が描かれている。	当館蔵
144	第二学年「図法幾何」Plate 1	明治39年(1907)	森井健介	「図法幾何学」(Descriptive Geometry)あるいは「図学」の問題である。抽象的な点・線・面の関係を作図によって求める。問題1は任意に与えられた1直線が水平・鉛直投影面と交わる点を求める問題。問題2は任意に与えられた直線の実長を求める問題で、空間中で直線を回転させ投影面と平行とすることで求めている。問題3は与えられた1平面(投影面との交線(軌線)として描かれている)上の1直線を描く問題。問題4は与えられた2平面の交線を描く問題への答えとなっている。	当館蔵
145	第二学年「陰影法」課題 Plate 3	明治36年(1903)	沖巖	陰影を描く問題である。陰(Shade)とは、面の向いている方向と光源の方向の関係から照らされずに暗くなっている部分をいい、影(Shadow)とは光が遮られることで暗くなる部分を言う。影の作図には、直線と面の交点や、平面と平面の交線を繰り返し求める必要があり、作図のためには図法幾何学の理解が必要となる。	当館蔵
146	第三学年「機械図」課題 「Heart Eccentric」	明治41年(1908)	森井健介	偏心ハートカムを描いたもの。アルキメデス螺旋をオフセットさせた形状となっている。	当館蔵
147	第三学年「機械図」課題 「Plummer Block」	明治41年(1908)	森井健介	軸架を描いたもの。断面図を用いてパーツの組み立てを表現した図となっている。	当館蔵
148	第三学年「機械図」課題 「Bevel Wheel」	明治37年(1904)	沖巖	Data for Bevel Wheel Larger Pitch circle = 16 cm. in diam. No of tuth = 32. 3. Bevel angle = 20° Thickness of wheel = 3 1/2 cm. Shaft hole = 3 1/4 cm in diam. (以下省略)という課題条件が英文で与えられた。	当館蔵
149	第三年課題 「Steam Fire Pump」	明治29年(1896)	多田文秋(重子)	S. Petit 『産業実務家』 PL. 116の模写。多田は海軍造船大佐。	当館蔵
150	第三年課題 「Steam Engine」	明治33年(1900)	小山朝佐、伊藤孝司	S. Petit 『産業実務家』 PL. 51-52の模写。小山は南満州工業専門校長。伊藤は海軍造船中尉。	当館蔵
151	第三年課題 「滑車」	明治41年(1908)	森井健介	S. Petit 『産業実務家』 PL. 22の模写。	当館蔵
152	『産業実務家』 PL. 22 「滑車」	19世紀後半	Stanislas Petit	鎖と滑車からなるハンガーの図。チェーンのリングは異なる半径の円弧の組み合わせで描かれており、学生がディバイダで写したときについたと思われる穴が開いている。	当館蔵
153	写生画 (学生作品)	明治33年(1900)	加納盛吉	加納は内務省技師。大学院在学中の明治37年に東京の大倉書店から「機械運動学」を出版。後、樋口造船鉄工所取締役。	当館蔵
154	写生画 (学生作品)	明治33年(1900)	大熊喜邦	大熊は建築家・建築史家。代表作として国会議事堂・内閣文庫がある。	当館蔵
155	写生画 (学生作品)	大正11年(1922)	鈴木義一	鈴木(大正13年卒・医科)は開業医・俳人	当館蔵
156	写生画 (学生作品)	大正9年(1920)~11年(1922)頃	K. Umeda		当館蔵

	資料名	年代	著者・制作者	解説	所蔵者
157	木造ジョイント模型			洋小屋（キングポスト・トラス）の垂木とキングポストを繋ぐ継ぎ手と垂木と梁を繋ぐ段状の継ぎ手。木製。	当館蔵
158	『題画集』			画学会は、画学教室の教授と学生によって組織された絵画の同好会で、句会のように、参加者は決められた画題で絵を描き、優れていると思う作品に投票して、講評を受けた。第九回題画集（画題：楽み雨）、明治33年題画集（画題：散歩 夕暮 緑 春雨 霞 雲 恐 盛 迷 赤 明暗）	当館蔵
159	写生画	明治31年（1898）		『明治31年題画集』（画題：愉快 枯木生花 麝在処自然香）内採録の写生画	当館蔵
160	自在画標本「面」「鼓」	明治20年代か		画学教室では自在画標本として、明治22年に鼓（大小）を購入している	当館蔵
161	投影面付き正十二面体、双十二角錐模型	19世紀後半	J. Schröder 製 ダルムシュタット/ドイツ	正十二面体の作図と、これを任意の方向から投影した作図および、双十二角錐の正投影を表した模型。付属の立体が失われているが、正十二面体は穴が2箇所あり、直立させたときと斜めに回転させたときの関係を理解できるようになっていた。木製に紙貼り。	当館蔵
162	投影面付き円環体模型	19世紀後半	J. Schröder 製 ダルムシュタット/ドイツ	円環体と、これを任意の方向から投影した作図を表した模型。付属の立体が失われているが、穴が2箇所あり、直立させたときと斜めに回転させたときの関係を理解できるようになっていた。木製に紙貼り。	当館蔵
163	Polytechnisches Arbeits-Institut J. Schröder. Actien Gesellschaft Darmstadt	1889年（複写）	J. Schröder	ドイツダルムシュタット、J. Schröderの図学教材カタログ	当館蔵
164	化学実験室（明治末）と化学の講義のようす	明治末、昭和前期		化学実験室の写真は大正2年の『向陵誌』より。生徒は着物姿が多い。講義のようすは昭和期に入ってからのもと思われる。	当館蔵
165	音叉	1870年代	Rudolph Koenig パリ、フランス	音叉は振動を観察するほか、多様な実験で用いられた。フーコーの回転鏡も、圧搾空気を笛に通し、発する音の高さを調整しながら鏡の回転数を一定にしたが、音の高さの調節は音叉を用いて行った。	当館蔵
166	音響分析機	1870年代	Rudolph Koenig パリ、フランス	機械のハンドル側にはガスの炎を出す細い管の列があり、それらは横の共鳴管と管で結ばれている。炎はハンドルでまわす仕組みの鏡に映して観測する。或る音が発せられると、振動している共鳴管と結ばれた炎のみが振動する。	当館蔵
167	Koenig Sound Analyzer	平成24年10月11日	David Pantalony 西オンタリオ大学、カナダ	音響分析機による音の視覚化の再現。カナダ科学技術博物館学芸員のパンタロニー博士によって、カナダの西オンタリオ大学物理学科で行われた。音の変化に応じて炎の形が変わるのがわかる。4分26秒。	個人蔵
168	島津式感応起電機	20世紀前半	島津製作所	金属片がはりつけられた二枚のガラス版を逆方向に回転させると、金属片が互いに電気を及ぼしあい、電気が起こる。島津の2代目梅治郎は、15歳（1884年）の時にこの型の起電機を自分で作ることに成功した。	当館蔵
169	検糖計	1900年前後	C. Reichert ウィーン、オーストリア	偏光プリズム2つが内部にあり、それらのなす角度を変化させて、中間に置いた試料の旋光性を観測する機器。角度が精密に読み取れるよう、レンズと反射鏡が取り付けられている。	当館蔵
170	検糖計チューブ サーマメーター	19世紀末～20世紀前半		検糖計チューブは試料を入れて検糖計に取り付ける。サーモメーターは試料の温度測定に用いたものと思われる。	当館蔵
171	検糖計 教育用掛図	明治23年7月30日	第一高等中学校	検糖計（「ザハリメートル」）の教育用掛図。機器の説明のために、教科書等の挿絵を拡大した掛図が用いられた。	当館蔵
172	ネレンバルク偏光器	19世紀後半～20世紀前半	Negretti & Zambra ロンドン、イングランド	中間の台に何も無いときには、上下の板で反射された末に出る光は、上下の板が直交する位置にある場合に最も弱くなる。台上に物質を置くと、その旋光性に応じて、光が最も弱くなるときの上下の板の位置関係が変化する。	当館蔵
173	ダニエル湿度計 (Daniell Hygrometer)	19世紀後半		1820年にダニエルによって発明された湿度計。低い球内にはエーテルが入っており、管内はエーテルで満たされている。高い球の温度を下げた低い球に露が着く時の管内外の温度を測定し、湿度を算出する。	当館蔵
174	目盛浮秤（験水器）	19世紀末～20世紀前半		ガラス管の下には水銀が入っている。容器に液体を入れ、ガラス管がどこまで沈んだかを見て、液体の比重を測定する。	当館蔵
175	スフェロメーター	20世紀前半	島津製作所	ねじを用いて薄い板などの厚みを正確に測定するための機器。球指しともいう。横の定規でおおよその厚さにあわせ、その後ねじの回転する角度で精密な厚さを測る。	当館蔵
176	オシログラフ部品	1920年代	The Cambridge and Paul Instrument Co. Ltd ケンブリッジ、イングランド	油を満たした中にヴァイブレーター（電流測定用と電圧測定用の2つ）をつるし、ヴァイブレーター内の鏡が反射する光を観測する。油の粘度は温度によって異なるので、温度計が取り付けられている。	当館蔵
177	オシログラフ内部			オシログラフ上部のふたを外して上から見たところ。	当館蔵
178	オシログラフと記録用のカメラを組合せたところ	1920年頃	ケンブリッジ社	オシログラフから出た光をカメラの中に通して撮影する。中ではフィルムがモーターによって回転させられており、電流の時間変化が記録される。ケンブリッジ社のカタログに掲載されていた図。	当館蔵
179	オシログラフ用カメラの内部			オシログラフ用カメラの側面のふたを開けたところ。リールが二つあり、モーターのついた下のリールが回転してフィルムを巻き取る。	当館蔵
180	回転フィルムカメラの内部			回転フィルムカメラのふたを開けたところ、フィルムが回転して信号の時間変化を記録する。	当館蔵
181	回転フィルムカメラ		横河電機製作所	外に回転機を取り付け、内部の円形のフィルムを回転させながら撮影するための装置。弾丸速度などの、極めて短い時間に行われる測定に用いられた。	当館蔵
182	オシログラフ用ヴァイブレーター	1920年代	The Cambridge and Paul Instrument Co. Ltd ケンブリッジ、イングランド	内部に細い金属線と、それらに取り付けられた鏡がある。線の両側は磁石であり、線に電流が流れると、その変化に応じて鏡が振れる。鏡に光を当てておき、反射光を観測して電流の時間変化を観測する。	当館蔵
183	オシログラフ用カメラ	1920年代	The Cambridge Scientific Instrument Co. Ltd ケンブリッジ、イングランド	内部のフィルムを回転させるための装置が外に取り付けられている。オシロスコープなどから発した光を、フィルムを流しながら撮影するための機器。	当館蔵
184	油拡散真空ポンプA型（複製）およびC型	1935年頃	理化学研究所	理化学研究所が1935年に特許を取得した油拡散ポンプ。A型・B型と、両者を組み合わせたC型がある。展示品のうちA型は共通技術室に作成していただいた複製。	当館蔵
185	真空ポンプ	20世紀前半	C. Illies & Co., Contractors, Tokio（輸入業者） ドイツ語圏	判読できないがドイツ語らしい刻印がある。となりの理化学研究所製のものが購入される以前に使用されていた水銀拡散ポンプであろう。	当館蔵

* 資料名は「一高理科へようこそー科学する心」展用の資料名であり、駒場博物館ホームページで公開中の、デジタルアーカイブにある資料名とは異なる場合があります。